

深夜のコインランドリーには、私のほかに誰もいなかった。

町外れにある小さくて古いコインランドリー。その代わり値段が安いから、よく利用している。洗濯機が三台、乾燥機が四台。壁際に並んだプラスチックの椅子。蛍光灯の白い光だけが、無感情に照らしている。

外は土砂降りだった。傘を持ってきたのに、駅から走ってきてしまってスカートの裾がびしょびしょだ。洗濯機に衣類を放り込んでスタートボタンを押して、あとはただ待つだけ。スマホを見る気にもなれず、雨音を聞きながら壁際のプラスチックの椅子に座っていた。

(洗濯終わるまでに、雨止んでくれるかなあ……)

それから十分を過ぎた頃、扉が開いて男性がやって来た。

ずぶ濡れだった。髪も、Tシャツの肩口も、全部。それでも乱れた様子がなくて、どこか落ち着いて見

えた。

大きなビニール袋を肩に担いで、頭のとっぺんから雨粒を垂らしながら入ってきた。やや日焼けした肌に黒髪、Tシャツから透けて見える厚い胸板。店内をひと目で確認してから、視線がこちらに止まった。

(イケメンだ)

第一印象はそれだった。日焼けした肌、短く整えられた黒髪、彫りが深いというほどでもないのに、目鼻立ちがすっきりとまとまっている。

けれど顔よりも先に目がいったのは、体格だった。

Tシャツが雨で体に張りついていて、その下の輪郭がわかってしまう。広い肩幅、厚い胸板。Tシャツの袖から覗く腕が、ただ太いだけじゃなくて、使い込まれた筋肉の質感を持っている。

(……すご。体も鍛えてるのかな)

目が合った。慌てて逸らそうとしたけれど、向こうが軽く会釈をしたので私も頷いた。

「雨、すごいね」

「あ、はい……！ほんとに急に降り出して」

声のトーンが柔らかくて、思っていたより話しやすい人だった。フランクすぎる気もしたけれど、距離感は悪くなかった。

雨の話や、コインランドリーの待ち時間の話をした。そのうち自然と名前を覚えてもらって、篤広さんというらしかった。

ひとしきり話してから、会話がふっと途切れた。ガタガタ、ガタガタと床に振動が響き始めた瞬間、彼が椅子から腰を浮かせ、立ち上がった。

「まだ時間、かかるじゃん。暇だし、触っていい？」

なにを言われたのか、一瞬わからなかった。

「触るね」

(……え)

聞き返す間も与えられずに、大きな手が膝の上に
乗ってきた。スカートの上から、ただ置かれただけ。
それだけなのに、全身の産毛が逆立つような感覚が
した。

(ちょっと待って。触るって、触るってなにを……
?)

頭の中でぐるぐると言葉を探すのに、声が出な
かった。怒るべきか、笑って誤魔化すべきか、立ち上
がって距離を取るべきか。何もかもが一瞬で頭をよ
ぎって、でも体はどれも選ばなかった。

ただ、固まっていた。

「嫌なら言えよ」

軽い声だった。命令じゃない。確認でもない。「

言えばいい」という事実だけを、さらっと置いていくような言い方だった。

(言えば、いい……)

そうだ、言えばいい。言える。言えるはずだった。「ちょっと、なにしてるんですか」とか、「やめてください」とか、そのくらいの言葉は持っているはずだった。

けれど断る言葉を探しているうちに、手がゆっくりと動き始めた。スカートの裾の方へ、少しずつ。

「あ、あの……」

「ん？」

整った顔が思ったより近かった。目が合う。日焼けした肌、涼しげな目元。篤広さんは「なに？」という顔をしていたけれど、手は止まらなかった。

「や……っ、あの……ッ」

「声、でかいよ。雨降ってるけど、近くにはコンビニあるし、人通るかも。外に聞こえたらまずいんじゃない？」

外をちらっと見て、また正面を向く。雨は依然として激しかった。窓ガラスに雨粒がぶつかる音が絶え間なく続いている。

（そ、そんな……！ 聞こえてたら、どうしょ……っ）

スカートの上から、おまんこに大きな手が触れてきた。

「ひっ……んっ」

押し当てるだけで動かない。それだけなのに、ぞわりと全身の産毛が逆立った。 ゆっくりと手が動き始めた。膝の上を、スカートの上から撫でるように。荒々しくない。急いでいない。熱を確かめる

ような、静かな動き。

「あ……っ」

（やっ……、スカートの上から、手が……っ）

すりすり、と布越しに太ももを撫でられる。大きな手のひらが触れているだけなのに、その熱が布を通り越して肌まで届いてくる気がした。

「力、抜けよ。わかるから」

ぼそっと篤広さんが言った。

（わかる、って……なに、が……っ）

意味を考える前に、手が内腿のほうへ動いていた。ゆっくりと、でも確実に。スカートの裾が少しずつ押し上げられていく。

「ちょ……っ！」